

猿面冠者

太宰治

青空文庫

どんな小説を読ませても、はじめの二三行をはしり読みしたばかりで、もうその小説の楽屋裏を見抜いてしまったかのように、鼻で笑つて巻を閉じる傲岸不遜ごうがんふそんの男がいた。ここに露西亞ロシヤの詩人の言葉がある。「そもさん何者。されば、わずかにまねごと師。気にするがものもない幽霊か。ハロルドのマント羽織つた莫斯科モスクワ子。他人の癖の翻案か。はやり言葉の辞書なのか。いやさて、もじり言葉の詩とでもいったところじゃないかよ」いづれそんなところかも知れぬ。この男は、自分では、すこし詩やら小説やらを読みすぎたと思つて悔いている。この男は、思案するときにも言葉をえらんで考えるのだそうである。心のなかで自分のことを、彼、と呼んでいる。酒に酔いしれて、ほとんど我をうしなつているように見えるときでも、もし誰かに殴られたなら、落ちついてつぶや咳く。「あなた、後悔しないように」ムイシユキン公爵の言葉である。恋を失つたときには、どう言うであろう。そのときには、口に出しては言わぬ。胸のなかを駆けめぐる言葉。「だまって居れば名を呼ぶし、近寄つて行けば逃げ去るのだ」これはメリメのつましい述懐ではなかつたか。夜、寢床にもぐつてから眠るまで、彼は、まだ書かぬ彼の傑作の妄想にさいなまれる。そのときには、ひくくこう叫ぶ。「放してくれ！」これはこれ、芸術家のコンフィテオール。

それでは、ひとりで何もせずにはぼんやりしているときには、どうであろう。口をつけて出るというのである、『Nevermore』という独白が。

そのような文学の糞から生れたような男が、もし小説を書いたとしたなら、いったいどんなものができるだろう。だいたいちに考えられることは、その男は、きつと小説を書けな
いだろうと言うことである。一行書いては消し、いや、その一行も書けぬだろう。彼には、
いけない癖があつて、筆をとるまえに、もうその小説に謂いわばおしまいの磨きまでかけて
しまうらしいのである。たいてい彼は、夜、蒲団ふとんのなかにもぐつてから、眼をぱちぱちさ
せたり、にやにや笑つたり、せきをしたり、ぶつぶつわけのわからぬことを呟つぶやいたりして、
夜明けちかくまでかかつてひとつの短篇をまとめる。傑作だと思ふ。それからまた彼は、
書きだしの文章を置きかえてみたり、むすびの文字を再吟味してみたりして、その胸のな
かの傑作をゆつくりゆつくり撫なでまわしてみるのである。そのへんで眠れたらいいのであ
るが、いままでの経験からしてそんなに工合くわいがよくいったことはいちどもなかったとい
う。そのつぎに彼は、その短篇についての批評をこころみるのである。誰々は、このよう
な言葉でもってほめて呉れる。誰々は、判らぬながらも、この辺の一箇所をぼつんと突い
て、おのれの慧眼けいがんを誇る。けれども、おれならば、こう言う。男は、自分の作品につい

てのおそらくはいちばん適確な評論を組みたてはじめる。この作品の唯一の汚点は、などと心のなかで呟くようになると、もう彼の傑作はあとかたもなく消えうせている。男は、なおも眼をぱちぱちさせながら、雨戸のすきまから漏れて来る明るい光線を眺めて、すこし間抜けづらになる。そのうちにうつらうつらまどろむのである。

けれども、これは問題に対してただしく答えていない。問題は、もし書いたとしたならば、この男の胸は、扁平胸といって生れながら醜くおしつぶされた形なのであるから、傑作は胸のうちにありますという彼のそのせいっぱいの言葉も、いよいよ芸がないことになる。こんなことからしても、彼が一行も書けぬだろうという解答のどんなに安易であるかが判るのである。もし書いたとしたならば、というのである。問題をもっと考えよくするために、彼のどうしても小説を書かねばならぬ具体的な環境を簡単にこしらえあげてみてもよい。たとえばこの男は、しばしば学校を落第し、いまは彼のふるさとのひとたち、たからもの、という蔭口をきかれていゝ身分であつて、ことし一年で学校を卒業しなければ、彼の家のほうでも親戚しんせきのものたちへの手前、月々の送金を停止するというあ

んばいになつていたとする。また仮にその男が、ことし一年で卒業できそうもないばかりか、どだい卒業しようとする腹がなかつたとしたなら、どうであろう。問題をさらに考えよくするために、この男がいま独身でないということにしよう。四五年もまえからの妻帯者である。しかも彼のその妻というのは、とにかく育ちのいやしい女で、彼はこの結婚によつて、叔母ひとりを除いたほかのすべての肉親に捨てられたという、月並みのロマンスを匂わせて置いてもよい。さて、このような境遇の男が、やがて来る自鬻じよくの生活のために、どうしても小説を書かねばいけなくなつたとする。しかし、これも唐突である。乱暴でさえある。生活のためには、必ずしも小説を書かねばいけないときまつて居らぬ。牛乳配達にでもなればいいじゃないか。しかし、それは簡単に反駁はんぱくされ得る。乗りかかつた船、という一言でもつて充分であろう。

いま日本では、文芸復興とかいう訳のわからぬ言葉が声高く叫ばれていて、いちまい五十銭の稿料でもつて新作家を捜しているそうである。この男もまた、この機を逃さず、とばかりに原稿用紙に向つた、とたんに彼は書けなくなつていたという。ああ、もう三日、早かつたならば。或いは彼も、あふれる情熱にわななきつつ十枚二十枚を夢のうちに書き飛ばしたかも知れぬ。毎夜、毎夜、傑作の幻影が彼のうすつぺらな胸を騒がせては呉れる

のであったが、書こうとすれば、みんなはかなく消えうせた。だまって居れば名を呼ぶし、近寄って行けば逃げ去るのだ。メリメは猫と女のほかに、もうひとつの名詞を忘れている。傑作の幻影という重大な名詞を！

男は奇妙な決心をした。彼の部屋の押入をかきまわしたのである。その押入の隅には、彼が十年このかた、有頂天な歓喜をもつて書き綴った千枚ほどの原稿が曰く^{いわ}ありげに積まれているのだそうである。それを片っぱしから読んでいった。ときどき頬をあからめた。二日かかって、それを全部読みおえて、それから、まる一日ぼんやりした。そのなかの「通信」という短篇が頭にのこった。それは、二十六枚の短篇小説であつて、主人公が困っているとき、どこからか差出人不明の通信が来てその主人公をたすける、という物語であつた。男が、この短篇にことさらに心をひかれたわけは、いまの自分こそ、そんなよい通信を受けたいものだと思つたからであらう。これを、なんとかしてうまく書き直してごまかそうと決心したのである。

まず書き直さねばいけないところは、この主人公の職業である。いやはや。主人公は新作家なのである。こう直そうと思つた。さきに文豪をこころぎして、失敗して、そのとき第一の通信。つぎに革命家を夢みて、敗北して、そのとき第二の通信。いまは、サラリイ

マンになつて家庭の安樂といふことにつき疑い悩んで、そのとき第三の通信。こんなふう
に、だいたいの見とおしをつけて置く。主人公を、できるだけ文学臭から遠ざけること。
そうして革命家をこころざしてからは、文学のブの字も言わせぬこと。自分がそのような
境遇にあつたとき、心から欲しいと思つた手紙なり葉書なり電報なりを、事実、主人公が
受けとつたことにして書くのだ。これは楽しみながら書かねば損である。甘さを恥かしが
らずに平氣な顔をして書こう。男は、ふと、「ヘルマンとドロテア」という物語を思い合
せた。つぎつぎと彼を襲うあやしい妄念を、はげしく首振つて追い払いつつ、男はいそい
で原稿用紙にむかつた。もつと小さい小さい原稿用紙だつたらいいなと思つた。自分にも
何を書いているのか判らぬくらいにくしゃくしゃと書けたらいいなと思つた。題を「風の
便り」とした。書きだしもあたらしく書き加えた。こう書いた。

——諸君は音信をきらいであろうか。諸君が人生の岐路に立ち、こつきゅう泣泣すれば、どこ
か知らないところから風とともにひらひら机上へ舞い来つて、諸君の前途に何か光を投げ
て呉れる、そんな音信をきらいであろうか。彼は仕合せものである。いままで三度も、そ
のような胸のときめく風の便りを受けとつた。いちどは十九歳の元旦。いちどは二十五歳
の早春。いまいちどは、つい去年の冬。ああ。ひとの幸福を語るときの、ねたみといつく

しみの交錯したこの不思議なよろこびを、君よ知るや。十九歳の元旦のできごとから物語ろう。

そこまで書いて、男は、ひとまずペンを置いた。やや意に満ちたようであった。そうだが、この調子で書けばいいのだ。やはり小説というものは、頭で考えてばかりいたって判るものではない。書いてみなければ。男は、しみじみその心のうちで呟き、そうしたいへんたのしかつたという。発見した、発見した。小説は、やはりわがままに書かねばいけないものだ。試験の答案とは違うのである。よし。この小説は唄いながら少しづつすすめてゆこう。きょうは、ここまでにして置くのだ。男は、もいちどそつと読みかえしてみても、その原稿を押し入るのなかに仕舞い込み、それから、大学の制服を着はじめた。男は、このごろたえて学校へ行かないのであるが、それでも一週間にも一二度ずつ、こうして制服を着て、そわそわ外出するのである。彼等夫婦は或る勤人の二階の六畳と四畳半との二間を借りて住んでいるのであって、男はその勤人の家族への手前をつくろい、ときどきこんなふうに登校をよそうのであった。男には、こんな世間ていを気にする俗な一面もあつたわけである。またこの男は、どうやら自分の妻にさえ、ていさいをとりつくろっているようであ

る。その証拠には、彼の妻は、彼がほんとうに学校へ出ているものだと思われているらしいのだ。妻は、まえにも仮定して置いたように、いやしい育ちの女であるから、まず無学だと推測できる。男は、その妻の無学につけこみ、さまざまの不貞を働いていると見てよいけれども、だいたいは愛妻家の部類なのである。なぜと言うに、彼は妻を安心させるために、ときたま嘘を吐くのである。輝かしい未来を語る。

その日、彼は外出して、すぐ近くの友人の家を訪れた。この友人は、独身者の洋画家であつて、彼とは中学校のとき同級であつたとか。うちが財産家なので、ぶらぶら遊んでいる。人と話をしながら眉をしじゅうぴりぴりとそよがせるのが自慢らしい。よくある型の男を想像してもらいたい。その友人の許へ、彼は訪れたのである。彼は、もともとこの友人をあまり好きではないのである。そう言えば、彼は、彼のほかの二三の友人たちをもたいては好いてはいないのであるが、ことにこの友人が、相手をいらいらさせる特種ぎりよの技ぎ倆うを持つているので、彼はことにも好きになれないのだそうである。彼がでもこの友人を、きよう訪問したのは、まず手近なところから彼の歡喜をわけてやろうという心からにちがいない。この男は、いま、幸福の予感にぬくぬくと温まっているらしいが、そんなときには、人は、どこやら慈悲深くなるものらしい。洋画家は在宅していた。彼は、この洋

画家と対座して、開口一番、彼の小説のことを話して聞かせた。おれはこういう小説を書きたいと思っている、とだいたいのプランを語って、うまく行けば売れるかも知れないよ、書きだしはこんな工合いだ、と彼はたったいま書いて来た五六行の文章を、頬をあからめながらひくく言いだしたのである。彼は、いつでも自分の文章をすべて暗記しているのだそうである。洋画家は、れいの眉をふるわせつつ、それはいいと吃どもるようにして言った。それだけでたくさんなのに、要らないことをせかせか、つぎからつぎとしゃべりはじめた。虚無主義者の神への擲やゆであるとか、小人の英雄への反抗であるとか、それから、彼にはいまもってなんのことやら訳がわからぬのであるが、観念の幾何学的構成であるとさえ言った。彼にとつては、ただこの友人が、それはいい、おれもそんな風の便りが欲しいよ、と言つて呉れたら満足だったのである。批評を忘れようとして、ことさらに、「風の便り」などというロマンチックな題材をえらんだ筈はずである。それを、この心なき洋画家に観念の幾何学的構成だとかなんだとか、新聞の一行知識めいた妙な批評をされて、彼はすぐ、これは危いと思つた。まごまごして、彼もその批評の遊戯に誘いこまれたなら、「風の便り」も、このあと書きつづけることができなくなる。危い。男は、その友人の許からそこそこにひきあげたという。

そのまま、すぐうちへ帰るのも工合いがわるいし、彼はその足で、古本屋へむかった。みちみち男は考える。うんといい便りにしよう。第一の通信は、葉書にしよう。少女からの便りである。短い文章で、そのなかには、主人公をいたわりたい心がいっぱいあふれているようなそんな便りにしたい。「私、べつに悪いことをするのではありませんから、わざと葉書にかきます」という書きだしはどうだろう。主人公が元旦にそれを受けとるのだから、いちばんおしまいに、「忘れていました。新年おめでとうございます」と小さく書き加えてあることにしよう。すこし、とぼけすぎるかしら。

男は夢みるような心地で街をあるいている。自動車に二度もひかれそななった。

第二の通信は、主人公がひところはやりの革命運動をして、牢屋ろうやにいれられたとき、そのとき受けとることにしよう。「彼が大学へはいつてからは、小説に心をそそられなかつた」とはじめから断つて置こう。主人公はもはや第一の通信を受けとるまえに、文豪になりそこねて痛い目に逢っているのだから。男は、もう、そのときの文章を胸のなかに組立てはじめた。「文豪として名高くなることは、いまの彼にとって、ゆめのゆめだ。小説を書いて、たとえばそれが傑作として世に喧けんでん伝され、有頂天の歓喜を得たとしても、それは一瞬のよろこびである。おのれの作品に対する傑作の自覚などあり得ない。はかない一

瞬間の有頂天がほしくて、五年十年の屈辱の日を送るといふことは、彼には納得できなかつた」どうやら演説くさくなつたな。男はひとりで笑いだした。「彼にはただ、情熱のもつとも直ちよくせつ截せつなはけ口が欲しかつたのである。考えることよりも、唄うことよりも、だまつてのそのそ実行したほうがほんとうらしく思えた。ゲエテよりもナポレオン。ゴリキイよりもレニン」やつぱり少し文学臭い。この辺の文章には、文学のブの字もなくしなければいけないのだ。まあ、いいようになるだろう。あまり考えすぎすと、また書けなくなると。つまり、この主人公は、銅像になりたく思っているのである。このポイントさえはずさないようにして書いたなら、しくじることはあるまい。それから、この主人公が牢屋で受けとる通信であるが、これは長い長い便りにするのだ。われに策あり。たとえ絶望の底にいる人でも、それを読みさえすれば、もういちど陣営をたて直そうという気が起らずにはすまぬ。しかも、これは女文字で書かれた手紙だ。「ああ。様という字のこの不器用なくずしかたに、彼は見覚えがあつたのである。五年前の賀状を思い出したのであつた」

第三の通信は、こうしよう。これは葉書でも手紙でもない、まったく異様な風の便りにしよう。通信文のおれの腕前は、もう見せてあるから、なにか目さきの変つたものにするのだ。銅像になりそこねた主人公は、やがて平凡な結婚をして、サラリイマンになるので

あるが、これは、うちの勤人の生活をそのまま書いてやろう。主人公が家庭に倦怠けんたいを感じはじめている矢先。冬の日曜の午後あたり、主人公は縁側へ出て、煙草をくゆらしている。そこへ、ほんとうに風とともに一葉の手紙が、彼の手許へひらひら飛んで来た。「彼はそれに眼をとめた。妻がふるさとの彼の父へ林檎りんごが着いたことを知らせにしたためた手紙であった。投げて置かないで、すぐ出すといい。そう呟きつつ、ふと首をかしげた。ああ。様という字のこの不器用なくずしかたに彼は見覚えがあつたのである」このような空想的な物語を不自然でなく書くのには、燃える情熱が要るらしい。こんな奇遇の可能性を作者自身が、まじめに信じていなければいけないのだ。できるかどうか、とにかくやってみよう。男は、いきおいこんで古本屋にはいったのである。

ここの古本屋には、「チエホフ書翰集しよかん」と「オネーギン」がある筈だ。この男が売つたのだから。彼はいま、その二冊を読みかえしたく思つて、この古本屋へ来たわけである。「オネーギン」にはタチアナのよい恋文がある。二冊とも、まだ売れずにいた。さきに「チエホフ書翰集」を棚からとりだして、そちこち頁をひっくりかえしてみたが、あまり面白くなかつた。劇場とか病氣とかいう言葉にみちみちているのであつた。これは「風の便り」の文献になり得ない。傲岸不遜のこの男は、つぎに「オネーギン」を手にとつて、

その恋文の条を捜した。すぐ捜しあてた。彼の本であったのだから。「わたしがあなたに
 お手紙を書くそのうえ何をつけたすことがいりましよう」なるほど、これでいいわけだ。
 簡明である。タチアナは、それから、神様のみこころ、夢、おもかげ、囁き、憂愁、まぼ
 ろし、天使、ひとりぼっち、などという言葉をおくめもなく並べたてている。そうし
 てむすびには、「もうこれで筆をおきます。読み返すのもおそろしい、羞恥しゆうちの念と、恐
 怖の情で、消えもいりたい思いがします。けれども私は、高潔無比のお心をあてにしなが
 ら、ひと思いに私の運を、あなたのお手にゆだねます。タチアナより。オネーギン様」こ
 んな手紙がほしいのだ。はつと気づいて巻を閉じた。危険だ。影響を受ける。いまこれを
 読むと害になる。はて。また書けなくなりそうだ。男は、あたふたと家へかえつて来たの
 である。

家へ帰り、いそいで原稿用紙をひろげた。安楽な気持で書こう。甘さや通俗を気にせず、
 らくらくと書きたい。ことに彼の旧稿「通信」という短篇は、さきにも言ったように、謂
 わば新作家の出世物語なのであるから、第一の通信を受けとるまでの描写は、そっくり旧
 稿を書きうつしてもいいくらいなのであった。男は、煙草を二三本つづけざまに吸ってか
 ら、自信ありげにペンをつまみあげた。にやにやと笑いだしたのである。これはこの男の

ひどく困ったときの仕草らしい。彼はひとつの難儀をきとつたのである。文章についてであつた。旧稿の文章は、たけりたけつて書かれている。これはどうしたつて書き直さねばなるまい。こんな調子では、ひともおのれも楽しむことができない。だいいち、ていさいがわるい。めんどろくさいが、これは書き改めよう。虚栄心のつよい男はそう思つて、しぶしづ書き直しはじめた。

わかいつ分には、誰しもいちどはこんな夕を経験するものである。彼はその日のくれた、街にさまよい出て、突然おどろくべき現実を見た。彼は、街を通るひとびとがごとごとく彼の知合いだつたことに気づいた。師走しわすちかい雪の街は、にぎわつていた。彼はせわしげに街を往き来するひとびとへいちいち軽い会釈をして歩かねばならなかつた。とある裏町の曲り角で思いがけなく女学生の一群と出逢つたときなど、彼はほとんど帽子をとりそうにしたほどであつた。

彼はそのころ、北方の或る城下まちの高等学校で英語と独逸語ドイツとを勉強していた。彼は英語の自由作文がうまかつた。入学して、ひとつきも経たぬうちに、その自由作文でクラ

スの生徒たちをびつくりさせた。入学早々、ブルウル氏という英人の教師が、*What is Real Happiness?* ということについて生徒へその所信を書くように命じたのである。ブルウル氏は、その授業はじめに、*My Fairyland* という題目でいつぶう変った物語をして、その翌る週には、*The Real Cause of War* について一時間主張し、おとなしい生徒を戦慄させ、やや進歩的な生徒を狂喜させた。文部省がこのような教師を雇い入れたことは手柄であった。ブルウル氏は、チエホフに似ていた。鼻眼鏡を掛け短い顎鬚を内気らしく生やし、いつもまぶしように微笑んでいた。英国の将校であるとも言われ、名高い詩人であるとも言われ、老けているようであるが、あれでまだ二十代だとも言われ、軍事探偵であるとも言われていた。そのように何やら神秘めいた雰囲気、ブルウル氏をいつそう魅惑的にした。新入生たちはすべて、この美しい異国人に愛されようとひそかに祈った。そのブルウル氏が、三週間目の授業のとき、だまってポオルドに書きなぐった文字が *What is Real Happiness?* であった。いずれはふるさとの自慢の子、えらばれた秀才たちは、この輝かしい初陣に、腕によりをかけた。彼もまた、野紙の塵をしずかに吹きはらってから、おもむろにペンを走らせた。Shakespeare said, “——流石におおげさすぎると思った。顔をあからめながら、ゆつくり消した。右から左から前から後から、ペンの走る音がひくく聞えた。

彼は頬杖ついて思案にくれた。彼は書きだしに凝るほうであった。どのような大作であっても、書きだしの一行で、もはやその作品の全部の運命が決するものだと思っていた。よい書きだしの一行ができる、彼は全部を書きおわったときと同じようにぼんやりした間抜け顔になるのであった。彼はペン先をインクの壺にひたらせた。なおすこし考えて、それからいきおいよく書きまくった。Zenzo Kasai, one of the most unfortunate Japanese novelist
sat present, said, — 葛西善蔵は、そのころまだ生きていた。いまのように有名ではなかつた。一週間すぎて、ふたたびブルウル氏の時間が来た。お互いにまだ友人になりきれずにいる新入生たちは、教室のおのおのの机に坐ってブルウル氏を待ちつつ、敵意に燃える瞳を煙草のけむりのかげからひそかに投げつけ合った。寒そうに細い肩をすぼませて教室へはいつて来たブルウル氏は、やがてほろにがく微笑みつつ、不思議なアクセントでひとつの日本の姓名を呟いた。彼の名であった。彼はたいぎそうにのろのろと立ちあがった。頬がまつかだった。ブルウル氏は、彼の顔を見ずに言った。Most Excellent! 教壇をあちこち歩きまわりながらうつむいて言いつづけた。Is this essay absolutely original? 彼は眉をあげて答えた。Of course. クラスの生徒たちは、どつと奇怪な喚声をあげた。ブルウル氏は蒼白の広い額をさつとあからめて彼のほうを見た。すぐ眼をふせて、鼻眼鏡を右手で軽く

おやえ' If it is, then it shows great promise and not only this, but shows some brain behind it. 一語ずつ区切つてはつきり言つた。彼は、ほんとうの幸福とは、外から得られぬものであつて、おのれが英雄になるか、受難者になるか、その心構えこそほんとうの幸福に接近する鍵である、という意味のことを言い張つたのであつた。彼のふるさとの先輩葛西善蔵の暗示的な述懐をはじめに書き、それを敷衍しつづ筆をすすめた。彼は葛西善蔵といちども逢つたことがなかつたし、また葛西善蔵がそのような述懐をもらしていることも知らなかつたのであるが、たとえ嘘でも、それができてあるならば、葛西善蔵はきつと許してくれらるだろうと思つたのである。そんなことから、彼はクラスの寵を一身にあつめた。わかい群集は英雄の出現に敏感である。ブルウル氏は、それからも生徒へつきつきとよい課題を試みた。Fact and Truth. The Ainu. A Walk in the Hills in Spring. Are We of Today Really Civilis ed? 彼は力いっぱいに腕をふるつた。そうしていつもかなりに報いられるのであつた。若いころの名誉心は飽くことを知らぬものである。そのとしの暑中休暇には、彼は見込みある男としての誇りを肩に示して帰郷した。彼のふるさとは本州の北端の山のなかにあり、彼の家はその地方で名の知られた地主であつた。父は無類のおひとよしの癖に悪辣ぶりがたがる性格を持つていて、そのひとりむすこである彼にさえ、わざと意地わるくかかつて

いた。彼がどのようなしくじりをして、せせら笑って彼を許した。そしてわきを向いた。りなどしながら言うのであった。人間、気のきいたことをせんと。そう呟いてから、さも抜け目のない男のようにふいと全くちがった話を持ち出すのである。彼はずっと前からこの父をきらっていた。虫が好かないのだった。幼いときから気のきかないことばかりやらかしていたからでもあった。母はだらしないほど彼を尊敬していた。いまにきつとえらいものになると信じていた。彼が高等学校の生徒としてはじめて帰郷したときにも、母はまず彼の気むずかしくなったのにおどろいたのであったけれど、しかし、それを高等教育のせいであろうと考えた。ふるさとに帰った彼は、怠けてなどいかなかった。蔵から父の古い人名辞典を見つけたし、世界の文豪の略歴をしらべていた。バイロンは十八歳で処女詩集を出版している。シルレルもまた十八歳、「群盗」に筆を染めた。ダンテは九歳にして「新生」の腹案を得たのである。彼もまた。小学校のときからその文章をうたわれ、いまは智識ある異国人にさえ若干の頭脳を認められている彼もまた。家の前庭のおおきい栗の木の下にテエブルと椅子を持ちだし、こつこつと長編小説を書きはじめた。彼のこのよくなしぐさは、自然である。それについては諸君にも心あたりがないとは言わせぬ。題を「鶴」とした。天才の誕生からその悲劇的な末路にいたるまでの長編小説であった。彼は、

このようにおのれの運命をおのれの作品で予言することが好きであつた。書きだしには苦
 勞をした。こう書いた。——男がいた。四つするとき、彼の心のなかに野性の鶴が巣くつた。
 鶴は熱狂的に高慢であつた。云々^{うんぬん}。暑中休暇がおわつて、十月のなかば、みぞれの降る
 夜、ようやく脱稿した。すぐまちの印刷所へ持つて行つた。父は、彼の要求どおりに黙つ
 て二百円送つてよこした。彼はその書留を受けとつたとき、やはり父の底意地のわるさを
 憎んだ。叱るなら叱るでいい、太腹らしく黙つて送つて寄こしたのが氣にくわなかつた。
 十二月のおわり、「鶴」は菊半裁判、百余頁の美しい本となつて彼の机上に高く積まれた。
 表紙には驚^{わし}に似た鳥がところせましと翼をひろげていた。まず、その県のおもな新聞社へ
 署名して一部ずつ贈呈した。一朝めざむればわが名は世に高いそうな。彼には、一刻が百
 年千年のように思われた。五部十部と街じゆうの本屋にくぼつて歩いた。ビラを貼^はつた。
 鶴を読め、鶴を読めと激しい語句をいっぱい刷り込んだ五寸平方ほどのビラを、糊^{のり}のたつ
 ぷりはいつたバケツと一緒に両手で抱え、わかい天才は街の隅々まで駈けずり廻つた。
 そんな訳ゆえ、彼はその翌日から町中のひとたちと知合いになつてしまつたのに何の不
 思議もなかつた筈である。

彼はなおも街をぶらぶら歩きながら、誰かれとなくすべてのひとと目礼を交した。運わ

るく彼の挨拶がむこうの不注意からそのひとに通じなかつたときや、彼が昨晚ほね折つて貼りつけたばかりの電柱のビラが無慙むざんにも剥はぎとられてゐるのを発見するときには、ことさらに仰山なしかめつらをするのであつた。やがて彼は、そのまちでいちばん大きい本屋にはいつて、鶴が売れるかと、小僧に聞いた。小僧は、まだ一部も売れんです、とぶあいそに答えた。小僧は彼こそ著者であることを知らぬらしかつた。彼はしよげずに、いやこれから売れると思うよ、となにげなさそうに予言して置いて、本屋を立ち去つた。その夜、彼は、流石に幾分わずらわしくなつた例の会釈を繰り返しつつ、学校の寮に帰つて来たのである。

それほど輝かしい人生の門出の、第一夜に、鶴は早くも辱かしめられた。

彼が夕食をとり寮の食堂へ、ひとあし踏みこむや、わつという寮生たちの異様な喚声を聞いた。彼等の食卓で「鶴」が話題にされていたにちがいないのである。彼はつつましげに伏目をつかいながら、食堂の隅の椅子に腰をおろした。それから、ひくくせきばらいしてカツレツの皿をつついたのである。彼のすぐ右側に坐つていた寮生がいちまいの夕刊を彼のほうへのべて寄こした。五六人さきの寮生から順々に手わたしされて来たものらしい。彼はカツレツをゆっくり噛かみ返しつつ、その夕刊へぼんやり眼を転じた。「鶴」とい

う一字が彼の眼を射た。ああ。おのれの処女作の評判をはじめて聞く、このつきさされるようなおののき。彼は、それでも、あわててその夕刊を手にとるようなことはしなかった。ナイフとフォクでもつてカツレッツを切り裂きながら、落ちついてその批評を、ちらちらはしり読みするのであった。批評は紙面のひだりの隅に小さく組まれていた。

——この小説は徹頭徹尾、観念的である。肉体のある人物がひとりとして描かれていない。すべて、すり硝子^{ガラス}越しに見えるゆがんだ影法師である。殊に主人公の思いあがった奇々怪々の言動は、落丁の多いエンサイクロペジアと全く似ている。この小説の主人公は、あしたにはゲエテを気取り、ゆうべにはクライストを唯一の教師とし、世界中のあらゆる文豪のエッセンスを持つているのだそうで、その少年時代にひとめ見た少女を死ぬほどしたい、青年時代にふたたびその少女とめぐり逢い、げろの出るほど嫌悪するのであるが、これはいずれバイロン卿あたりの翻案であろう。しかも稚拙な直訳である。だいいち作者は、ゲエテをもクライストをもただ型としての概念でだけ了解しているようである。作者は、ファウストの一頁も、ペンテズイレエア的一幕も、おそらくは、読んだことがないのではあるまいか。失礼。ことにこの小説の末尾には、毛をむしられた鶴のぼさぼさした羽ばたきの音を描写しているのであるが、作者は或いはこの描写に依って、読者に完璧^{かんぺき}の

印象を与え、傑作の眩惑げんわくを感じさせようとしたらしいが、私たちは、ただ、この畸形的きけいな鶴の醜さに顔をそむける許りばかである。

彼はカツレツを切りきざんでいた。平気に、平気に、と心掛ければ心掛けるほど、おのれの動作がへまになった。完璧の印象、傑作の眩惑。これが痛かった。声たてて笑おうか。ああ。顔を伏せたままの、そのときの十分間で、彼は十年も年老いた。

この心なき忠告は、いったいどんな男がして呉れたものか、彼にもいまもって判らぬのだが、彼はこの屈辱をくさびとして、さまざまの不幸に遭遇しはじめた。ほかの新聞社もやっぱり「鶴」をほめては呉れなかったし、友人たちもまた、世評どおりに彼をあしらい、彼を呼ぶに鶴という鳥類の名で以てした。わかい群集は、英雄の失脚にも敏感である。本は恥かしくて言えないほど僅きんしやう少の部数しか売れなかった。街をとおる人たちは、もとよりあかの他人にちがいがなかった。彼は毎夜毎夜、まちの辻々のピラをひそかに剥いで廻った。

長編小説「鶴」は、その内容の物語とおなじく悲劇的な結末を告げたけれど、彼の心のなかに巣くっている野性の鶴は、それでも、なまなまと翼をのばし、芸術の不可解を嘆じたり、生活の倦怠けんたいを託かこったり、その荒涼の現実のなかで思うさま懊惱おうのう呻吟しんぎんすること

を覚えたわけである。

ほどなく冬季休暇にはいり、彼ははいよいよ気むずかしくなつて帰郷した。眉根に寄せられた皺しわも、どうやら彼に似合つて来ていた。母はそれでも、れいの高等教育を信じて、彼をほればれと眺めるのであつた。父はその悪辣ぶつた態度でもつて彼を迎えた。善人どうしは、とかく憎しみ合うものようである。彼は、父の無言のせせら笑いのかげに、あの新聞の読者を感じた。父も読んだにちがひなかつた。たかが十行か二十行かの批評の活字がこんな田舎にまで毒を流しているのを知り、彼は、おのれの中から岩か牝牛にしたかつた。

そんな場合、もし彼が、つぎのような風の便りを受けとつたとしたなら、どうであろう。やがて、ふるさつで十八の歳を送り、十九歳になつた元旦、眼をさましてふと枕元に置かれてある十枚ほどの賀状に眼をとめたというのである。そのうちのいちまい、差出人の名も記されてないこれは葉書。

——私、べつに悪いことをするのでないから、わざと葉書に書くの。またそろそろおしよげになつて居られるころと思います。あなたは、ちよつとしたことにでも、すぐおしよげなさるから、私、あんまり好きでないの。誇りをうしなつた男のすがたほど汚いものは

ないと思います。でもあなたは、けっして御自身をいじめないで下さいませ。あなたには、わるものへ手むかう心と、情にみちた世界をもとめる心とがおります。それは、あなたがだまつていても、遠いところにいる誰かひとりがきつと知って居ります。あなたは、ただすこし弱いだけです。弱い正直なひとをみんなでかばってだいじにしてやらなければいけないと思います。あなたはちつとも有名ではありませんし、また、なんの肩書もお持ちでございませぬ。でも私、おとといギリシャの神話を二十ばかり読んで、たのしい物語をひとつ見つけたのです。おおむかし、まだ世界の地面は固って居らず、海は流れて居らず、空気は透きとおって居らず、みんなまざり合って渾沌こんとんとしていたころ、それでも太陽は毎朝のぼるので、或る朝、ジュノーの侍女の虹にじの女神アイリスがそれを笑い、太陽どの、太陽どの、毎朝ごくろうね、下界にはあなたを仰ぎ見たてまつる草一本、泉ひとつないのに、と言いました。太陽は答えました。わしはしかし太陽だ。太陽だから昇るのだ。見ることのできるものは見るがよい。私、学者でもなんでもないの。これだけ書くのにも、ずいぶん考えたし、なんどもなんども下書しました。あなたがよい初夢とよい初日出をごろんになって、もつともつと生きることに自信をお持ちなさるよう祈っているもののあることを、お知らせしたくて一生懸命に書きました。こんなことを、だしぬけに男のひとに書

いてやるのは、たしなみなくて、わるいことだと思えます。でも私、恥かしいことは、なんにも書きませんでした。私、わざと私の名前を書かないの。あなたはいまにきつと私をお忘れになつてしまふだろうと思えます。お忘れになつてもかまわないの。おや、忘れていました。新年おめでとうございます。元旦。

(風の便りはここで終らぬ)

あなたは私をおだましました。あなたは私に、第二、第三の風の便りをも書かせると約束して置きながら、たつぷり葉書二枚ぶんのおかしな賀状の文句を書かせたきりで、私を死なせてしまふおつもりらしゅうございます。れいのご深遠なご吟味をまたおはじめになつたのでございませうか。私、こんなになるだろうということ、はじめから知っていました。でも私、ひよつとするとあの靈感とやらがあらわれて、どうやら私を生かすことができるのではないかしら、とあなたのためにも私のためにもそればかりを祈つ

ていました。やっぱり駄目なのね。まだお若いからかしら。いいえ、なんにもおつしやいますな。いくさに負けた大将は、だまつているものだそうでございます。人の話に依りますと「ヘルマンとドロテア」も「野鴨のかも」も「あらし」も、みんなその作者の晩年に書かれたものだそうでございます。ひとに憩いを与え、光明を投げてやるような作品を書くのに、才能だけではいけないようです。もしも、あなたがこれから十年二十年とこのにくさげな世のなかにどうにかして炬火きよかきどりで生きとおして、それから、もいちど忘れずに私をお呼びくだされたなら、私、どんなにうれしいでしょう。きつときつと参ります。約束してよ。さようなら。あら、あなたはこの原稿を破るおつもり？ およしなさいませ。このよな文学に毒された、もじり言葉の詩とでもいったような男が、もし小説を書いたとしたなら、まずぎつとこんなものだと素知らぬふりして書き加えでもして置くと、案外、世のなかのひとたちは、あなたの私を殺しつぷりがいいと言って、喝かつさい采を送るかも知れせん。あなたのよろめくおすがたがさだめし大受けでございましょう。そしておかげで私の指さきもそれから脚も、もう三秒とたたぬうちに、みるみる冷くなるでございましょう。ほんとうは怒っていないの。だってあなたはわるくないし、いいえ、理窟はないんだ。ふつと好きなの。あああ。あなた、仕合せは外から？ さようなら、坊ちゃん。もつと悪人

におなり。

男は書きかけの原稿用紙に眼を落してしばらく考えてから、題を猿面冠者とした。それはどうにもならないほどしっくり似合った墓標である、と思ったからであった。

青空文庫情報

底本：「晩年」新潮文庫、新潮社

1947（昭和22）年12月10日発行

1985（昭和60）年10月5日70刷改版

1999（平成11）年6月25日105刷

初出：「鵜 第二輯」

1934（昭和9）年7月

入力：村田拓哉

校正：青木直子

1999年12月17日公開

2013年4月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

猿面冠者

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>